いなほ

令和３年１２月２０日
令和３年度学校だより NO.38①
加古川市立平荘小学校

狂言学習を頑張っています（６年生）

１２月１３日（月）に、山口耕道先生をお招きして、６年生が狂言学習を行いました。
この日は、セリフだけではなく、『動き』をつけて練習をしました。
まず、『柿山伏』の練習からスタートしました。
すり足（移動の仕方）や座り方、立ち方、目線（どこを見るか）、扇子の使い方等、山口先生は、範を示しながら基本の『動き』を指導してくださいました。

山伏の役は、威張っている感じを出すようにする。胸を張って、自信満々の歩き方をする。すり足で歩く。観ている人たちに背中が向かないようにする。

目線をあえて上にする。目で見るだけでなく、顔を起こして高い所を見ることで、大きな柿の木を表現する。

山伏が飛び降りるシーン。柔道の受け身のようにする。すぐさまこける方が自分の体は痛くない。

山伏に呼びかけるように。遠くに呼びかける時は、早口にならないように。スローで。

足を縮めて、すぐ下に落ち、転がったところが舞台の中央になるようにする。

困っている時は、どうしようと思わないと伝わらない。畑主は、自分の大切に育てた柿の実を、山伏に黙って食べられて腹が立っている。懲らしめてやろうと思っただろう。山伏が下に落ちて転がった時の、畑主の心の変化を感じ取って表現する。山伏が畑主の言葉にのってくれるから、おもしろくなる。
「とびそうな～。とびそうな。」・・・

鳥、猿、鳶の真似をする山伏の見本を示してくださっています。

次に、『附子（ぶす）』の練習をしました。『附子（ぶす）』では、言葉を大切に、一言一言ゆっくりはっきりと伝えることが目標です。

「附子」は、何かわからない恐ろしいもの。それを怖がる太郎冠者・次郎冠者の気持ちを表現する。

「お掛物」はどこにかかっている？具体的に、どこにあるかを想定しながら演じる。

「附子」を真剣に取り合う。言葉を覚えたなら、あとは、どれだけ表情をつけるかだ。

「天目茶碗」は、どこにある？空中にある？置いている場所を想定する。お茶碗を割っておもしろいと思って演じる。心のどこかに罪悪感もある感じで演じる。

山口先生のお話

山口先生には、毎回、全力でご指導いただき、とてもありがたい機会をいただいております。

- 「みなさん、不安にならないように。狂言に、『これは、間違っている。』ということはない。一緒に作っていきましょう。自信をもって、（山口先生に）ぶつかってきてほしい。（山口先生は）みなさんの気持ちを感じ取れないほど鈍感ではないです。」
- 「夢中になってほしい。狂言の練習は、一時のことかもしれないけれど、真剣に取り組むことで、きっと何か得るものがあると思う。」
- 「恥ずかしいと思う気持ちが起こるかもしれないが、『恥ずかしい』という気持ちは、世間には通用しない。」
- 「狂言は、人様に笑われようとしている。狂言は、笑われることを求めている。笑いのバロメーターだ。」
- 「狂言は、トータル的に笑いが起こるように、みんなでリレーをしてつないでいく。できるだけ自分のふだんの姿を隠して、変身して表現していくのがお芝居。今まで自分が経験しなかったことを、お芝居の中で経験する。そのことで、人としてのはばが広がるのである。」

（続く）